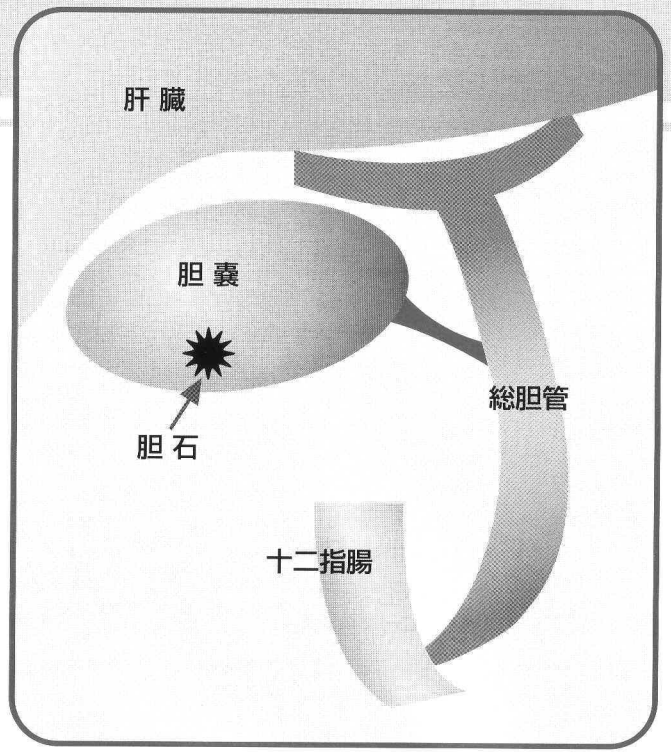
胆石症が疑われた時に受ける検査

日本臨床検査専門医会
谷口 信行



胆嚢は、右上腹部にあり肝臓下面に接するように存在する袋状の臓器です。形はいわゆる“茄子型”をしています。内部に肝臓で作られる緑色の胆汁をためる役目があり“食事”特に脂肪性の食事で収縮がおこり、ためていた胆汁を総胆管経由で十二指腸に出します。胆石症とは、この胆嚢の中に、何らかの原因で石ができたものをいいます。胆石症＝腹痛と考えがちですが、実際には多くの胆石症は無症状で、頻度も成人の五～一〇％程度で発見されます。痛みが起こるのは、胆石が移動し胆嚢の出口（胆嚢頸部といいます）に詰まり、胆嚢内に炎症が起こったときで、症状は右上腹部を押すと強い痛みがみられます。あらかじめ胆石がある方でこのような症状が急に起こった場合は、早めに医療機関を受診することをお勧めします。

さて、胆石の種類では、コレステロール系結石とビリルビンを主とする色素系結石が多くを占めますが、最近では食生活との関連から前者のコレステロール系のものが多くなっています。胆石症の検査として最も多く行われているのは、画像診断のなかの腹部超音波検査（腹部エコー）です。多くの胆石症は無症状なため、人間ドックまたは他の疾患で受けた超音波検査で偶然見つかることが多いと思われます。この場合、血液検査では異常がないことが多く、仮に胆石症で血液検査に異常が見られるときには、胆嚢から十二指腸につながる総胆管にも結石が存在する可能性があり、精密検査が必要となります。胆石があっても無症状で、超音波検査で胆嚢内に異常がなく、かつ総胆管に結石がない場合は、しばしば経過観察となることが多いようです。しかし、胆石により何らかの症状がある場合や、超音波検査で胆石以外に胆嚢、総胆管に何らかの所見が見られるときは、ＣＴ、ＭＲＩなどの検査を行い、手術の必要性について検討されます。

超音波検査で経過を観察する場合、胆石の数、大きさに変化が無いかをチェックしますが、同時に大切な点は胆嚢に胆石以外に胆嚢癌のように胆石に合併しやすい重要な疾患がないかを調べることです。検査間隔は施設により異なりますが、六ヵ月から一年おきに超音波検査と血液検査でチェックされることが多いようです。なお、超音波検査はレントゲンを用いる検査と異なり被爆の心配はなく、かつ痛くもありませんので安心して受けることができます。